
異世界でベタに生きる

じゃがいも畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でベタに生きる

【Nコード】

N5412Z

【作者名】

じゃがいも畑

【あらすじ】

突然、異世界に飛ばされた主人公が、がんばるお話です。

1（前書き）

拙い作品ですが、宜しく願います。

理不尽ってやつは、本人は別に何か悪いことをしたわけでもないのに被るものだ。

親に暴力を受けたり、学校でいじめにあったり、通り魔に突然殺されたり…。

平和な日本でだってこれだ、発展途上国や人権のない国なんてもっとひどいことがあるだろう…。

そしてやっかいなことに、理不尽ってのはどんなに自分の正当性を訴えたり、悲劇を嘆いても、向こうから消えてくれたりはしないし、ひどい時なんか、何もすることができないままこっちが潰されてしまふときだってある。

まことに憎らしい事象だ…

ホントに憎らしい…今まで、そんなに理不尽なことで相対したことがなかったからか、余計にそう思える。

俺は今、森の中に立っている…何の前触れもなく、いきなり森の中に立っている…立派な木が乱立してるせいか、太陽の光はかるうじで届く程度のように薄暗い…そして、ちょい寒い…

空気のうまさが尋常でない点からしてもかなりレベルの高い森なのだろう…シシガミ様とか出そうだ…

さて、ではなぜこんな高レベルな森に俺はいるのだろうか…と考えてみても答えは一向に出てこない。

なんせ5分前まで池袋にいたのだ。

ホントにフと気づいたらここにいた…そんな感じなのだ。

その証拠に服装は制服（夏服）、カバンは通学用のスポーツバッグという装いで、自分が池袋の繁華街を歩いていた時のまんまである。

「はあ…どうなってんだ…混乱しすぎて脳ミソ破裂しそう…うがぁ
あああああ！」

俺は頭を抱えながら咆哮し、そのままその場でフリーズした。

15分ほど無の境地に陥った後、再起動した俺はとりあえずわき上がる恐怖や不安、怒りを無理やり抑え込むことにした。

とりあえず、現状把握と行動指針の決定が最優先事項だな…と己に言い聞かせる。

まず始めにしたのが携帯チェックだが、当然これは圏外…時刻を確認してみたところ、19:32と表示されてはいるが、今いる場所は一応太陽の光が確認できるため、これも特に意味はなさそうだ。

あとはまあ…財布の中には、お金とPASMO、各種ポイントカード。

バッグの中には汗まみれの柔道着とインナー、あとはノートに教科書…およそサバイバルには不必要なものばかりだ。

絶望的な状況なのを再確認し、次は行動指針だが…これに関しては「とりあえず、ここにいてもしょうがないよな…なんせ木しかないし…まずは移動だな…誰かいないかなあ…」
という結論に至るまでそれほど時間はいらなかった。

つということで、ひとまず移動するということに意識を集中して、余計なことは考えないようにする。

周りは巨木ばかりで木の実すら発見できないし、時々発見する草花やキノコは見たことないものばかり…虫やネズミっぽいものばかり…なんだここ…マジでどこなんだよ…

しばらく闇雲に歩き回ってわかったことは、人の手が加わっていない大森林を歩くのは意外と大変で、比較的歩きやすい道を選んで歩いているとはいえ進むスピードが遅いってことだった。

じれったい思いに歯噛みするが、焦っても仕方ないと自分に言い聞かせさらに歩く。

「不幸中の幸いなのは、虫や小動物がわんさかいるってわけでもないってところか…それでもこの環境で野宿は絶対したくないな…」

とひとりごちていると、少し先の方からわずかだが水の流れる音が聞こえてきた。

急いでそっちの方へ進むと、陽の光が射し込む岩場が現れ、なだらかな流れの幅3メートルくらいの川を見つける。

「とりあえずこっからは川沿いを下流に向かって進もう…釣り人とかに会えるかもしれないし、村とかあるかもしれないしな…」

なんとなく希望が見えてきて多少、安堵する。

小休止した後は再び歩き出す。先ほどまでとは違い視界良好な岩場は移動しやすく、草や枝を掻き分けたり、虫とかをそこまで注意する必要がないため、逸る気持ちも重なつて小走りで移動する。

陽が傾き木々や川がオレンジ色に染まる頃、ようやく河原になっている場所に出ることができた。

周りの木もそこまでデカいのはなくなってきたいて、もうちょっとで森は抜けられるかもしれないな…という感じになってきた。

ここまでで大体、5時間…携帯を確認してみても初めて気づいたが、全然疲れていない…いくら俺が柔術やら柔道やらをやっているからって、見知らぬ森で5時間も動きまわって疲れ知らずとかありえねえ…身体能力が上がってる…？いやいやありえないだろ…
というところまで考えていたところ、「ぐうぐう」という腹の音が聞こえてきて、考えるのをやめた。

どう考えても答えが出ないことより、一先ず目先の危機についてだ。周りを見ても石、川、森しかないうえ、飲料水や食料はもちろん、ライターやナイフもない。植物やサバイバルの知識は浅いものならあるが、所詮キャンプレベルで全然信頼できない…。

さてどうしたもんか…ひとまず夕暮れを迎えている今、いくら河原で見通しがいいとはいえ、暗闇の中をここで一晩過ごす勇氣なんてない。

「携帯の電池はまだあるし、（携帯の）カメラのライトを頼りに夜通し移動するしかないな…疲れにくくなってるみたいだし、なんとかなるだろ…」

そう決めると、とりあえずジョギングレベルのスピードで下流へと向かう。

「がんばれ俺…」

「暗い…果てしなく暗い…マジかよもお…ふざけんなよ…」

心が折れそうになるくらいの闇が周りを包んでいる。

正直、舐めていたとしか言えない…暗すぎるぜ大自然…（涙）

月の光とカメラのライト…そして闇に目が慣れてきたとはいえ、現代日本の申し子である俺にはちょっとありえない暗さだ…

だがまあ…静寂さは漂っているが、無音でないことには助かってる…川の流れや風の吹く音、虫の鳴く声…鳥や獣の鳴き声には結構ビビるが、これにも結構慣れてきた。

音があることで、警戒することを忘れないでいれるし、正直、自分以外の生命を感じることで、恐怖と同時にある種の安心感も得れる。

そんなことを考えながら、慎重に河原を移動していると、さっきまではなかったある異変に気づく…

「視られてる？」

そう感じた瞬間に周りを見回す。

森側、木々の隙間を「サッ」と何かが移動したのを視界の隅で捉える。

背中からドツと冷や汗が出てくるのがわかる。体温も急に下がってきた…

マズイマズイマズイ…「敵」かもしれない…どうする…戦うか？

いやいやありえないだろ…対人戦ならまだしも…

敵は多分動物だ、こんな暗闇で襲われたらひとたまりもない。

ひとまず全速力で逃げるということしか思い付かない。…っという
か、逃げ切る以外の事態を考えたくない…

よし…行くぞ…「ダッ！」

と駆け出す。

足場が悪いし暗闇なのもあるしで全然スピードが出ないが、そんな
のは百も承知！とにかく全力疾走しかないんだよ！！

しばらく泣きながら走っていると、森の中から「カサツカサツ」と
いう音が聞こえてくる。

ヤバイ…並走してきている…しかも、こちらが向こうに気づいたの
を察知したのか、仲間を呼んだらしい…数が増えている。

恐怖で大声をあげそうになるのを抑え、どうするかを必死に考える。

敵はまだ襲ってきていない…ということは向こうはまだ体制が整っ
ていないか、こちら側の何かを警戒しているってことだ。

前者なら整い次第、後者ならこちらが今の状態を変化させたら襲わ
れる…

どうするどうするどうする…ある程度までは考えられるが、恐怖や
ら焦りやらで対応策を考えることができない。そしてその事実になら
に焦る…

そんな状態で河原を全力疾走し続けられるわけもなく、案の上、「
ガッ」という音と共にコケる。

「ぐっ…」

なんとか受け身はとったが、痛みが身体を駆け巡る。だがそんなこ

とに頓着している暇はない。

急いで立ち上がらなきゃと思い顔を上げると…

「おいおいマジかよ…」

すでに俺は何かに囲まれていた…川を背後にして、半円に、大体10体ぐらいいる。

恐る恐る、携帯のライトを周りに向けると…

俺の頭の中は驚愕の一色で染まった。

そいつらは二足歩行だった……

緑色でデコボコした体表、120〜130cmくらいの身長、ぷっくり出た腹と細い手足、潰れた輪郭にくちばしのように飛び出た鼻と口…

完全に化け物だった。

「カッン」という音がした。

携帯が手からこぼれ落ちた音だ。

光が途切れることはなかったが、本当ならすぐに拾うべきだろう。だけど俺にはそんな些末なこと、どうでもよかった。

「な、なんだよこれ…どうゆうことだよ!…」

俺はもう駄目だった。これまで抑え込んでいた恐怖や不安に支配され、身体は震え、携帯もその場に落とし、完全に我を忘れた。

「ふざけんな!なんだよこれ!どういうことだよ!ふざけんなよ!

」

四つん這いで、両手を地面に叩きつけながら…

泣き声にも怒声にも聞こえる声で…

涙も鼻水もダラダラ流れ流しながら俺は喚き散らした。

「ぎゃははっ」

「きいはは」

「きいーきいー」

俺のそんな惨状を嘲るようにその化け物達は声をあげた。その目は完全にこちらを見下しており、口は下卑た笑みを浮かべている。

だが、一匹の化け物が手に持ったボロボロに刃こぼれた剣をこちらに向けると雰囲気が変わった。

目には殺気を孕み、元々猫背だった体勢をさらに前傾にし、今にもこちらに飛びかからんとしている。

喰われる…

そう感じた…

その瞬間、10匹の化け物が各々の武器を振りかぶりながらこちらに飛びかかってきた！！

俺の心も身体も恐怖に固まった。

こんなわけのわからないところで、こんなわけのわからない化け物に殺されて喰われる…

数秒後に訪れる凄惨な情景を思い浮かべ、俺は生きる氣力を失った

……

「ふん、所詮、お主はその程度の男じゃったか…」

気が付いたら全力で横に飛び、河原をゴロゴロ転がっていた。

心に怒りが吹き荒れる… 身体に熱が蘇る…

あの日誓った言葉が脳裏に響く…

「うつせえんだよ！くそじじいが…」

立ち上がる… 立ち上がれる… あちこち痛いし、頭から血が流れているけど、今はこれぐらいが調度いい。

「この俺が、生きることを諦めるとかどんだけだよ… 修練不足だな… クソッ」

そう吐き捨て、心を鎮める…

身体の間々まで力を張り巡らす…

肚で息を吸い、吐く…

心を… 身体を… 戦闘のそれに変質させていく…

敵が人型でよかった。

人型であるのなら自分が持つ技も有効だ。

静かにゆっくり構えをとる。

「きい…?」

化け物の武器は俺のスポーツバッグをズスタにしてはいたが、俺自身には一太刀も当たっていなかった。

その事実が、よっぽど不思議だったのか、一匹がリーダー格に何かを問いかけている。

問いかけられた化け物も一瞬、呆けていたようだが、こちらに向き直り、改めて、

「キイキイ！キガアア！！」

と己の持つ武器をこちらに向け、喚いている。

それを合図に残りの9匹がこちらに襲いかかってくる。

俺と奴らの間合いはおおよそ7、8m…

向かってくる化け物の集団に隊列というものはなく、思い思いにこちらに向かってくる。

駆けて来る奴が5…

飛びかかって来るのが4…

俺は足に力を籠め…一気に空中にいる真ん中2匹の間に飛び込む
右手と左手で各々の顔を掴み、そのまま空中から地面に後頭部を叩きつける

「グチャツツ」という音と、両手に伝わる感覚に囚われないよう意識し、振り返り際に一番手近にいた2匹の足元に目掛けて、右足の蹴りを放つ…

足を払われ、浮いた2匹の頭上に俺は跳び、思いきり踏み潰す。

これで残り6匹…

前方左に2、右に3、背後に1。

まずは左の2匹へ向かう。

この時点でやっと自分達が攻撃されていることに気づき、2匹はこちらに向き直り、攻撃を仕掛けてきた。
だがもう遅い

1匹目には何もさせずに、大外刈を懸け、後頭部を地面に叩きつけ、潰す。

もう1匹はナイフによる刺突を仕掛けてきたが、半身にして避け、突き出してきた相手の右手首を左手で取り、大腰の要領で地面に投げ飛ばし、仰向けになった相手の剥き出しになった喉に向かい、思いきり拳を叩きこんで潰す。

すでに背後から3匹が迫っている。

振り向き様に立ち上がり、一番左に位置している1匹の懷に飛び込み肘を鳩尾に入れる。くの字になったそいつの首に腕を回し、首投げをしながら折る。

残りの2匹が持つてる手斧を叩き込んでくる。

一方は頭上から、一方は俺の右から横薙ぎに両者の武器を持つている手首を掴み、横薙ぎに武器を振った方に支え釣り込み足の要領で、体重移動と右手のひねりを利用し、転ばしながら背中から地面に叩きつける。

それと平行して左手で捕まえた手首を引き寄せ、一本背負いで相手を頭から地面に叩きつけ、潰す。

仰向けで寝転んでいた残った一匹の首に拳を叩き込んで、こいつにも止めを刺す。

残りはリーダー格の1匹だけだったが、周りを見回してもどこにもいない…

どうやらとっくの昔に森へ逃げていたようだ。

俺は緊張の糸が切れ、仰向けに倒れ込む…

「ふう〜…見たかクソツタレが…」

そう呟き、ちょっとだけ休憩をとることにする。

「スウウウ…ハアアア…」

俺は一度深呼吸をすると起き上がり、周りをもう一度確認した。

携帯電話の光でぼんやり照らされているその場所に向かい、それを拾う。

次にスタボロにされたバッグの状態を確かめる…までもなかった（苦笑）

柔道着と帯以外はここに捨てていくしかないな…

中からその2つを取りだしボロボロの柔道着を折りたたみ、奇跡的に損傷の少ない帯で結ぶ。

つとそこまでしてようやく気が付いたのが、自分の状態だ。

所々にこびり着いているいる血や肉片…それを認識した途端、胃の中から何かが逆流するのを感じた。

急いで川まで走り、そこで思いきりぶちまける。

少しして落ち着いたら、川の水で口を濯ぎ、手を洗う。血が多く着いているシャツの匂いも気になったので、その場で脱ぎ、簡単に水洗いした。

そうこうしているうちに、頭も働き始め、さっきの化け物どものことや、今いる場所のことについて考え始める。

「マジでここ、どこなんだ？あんな化け物があるなんて聞いたことないし、それにあの剣やナイフ…日本にポンポンあるようなもんじやないぞ…」

色々浮かんでは消えていく思考に俺は混乱を増していく。さっきまで落ち着いていたはずなのに、また発狂しそうなほど不安や恐怖がせりあがってくる。

そんな自分に気付き、一旦深呼吸をして落ち着かせる。

風の音や川の音を聞くことで心を鎮める努力をする。

未熟だな…つくづくそう思う。

だけど今はこうやって自分を保つしかないのもまた事実だ。

情けないが、これしかない…とにかく突き進むしかないんだと自分に言い聞かせる。

そうやってやっと落ち着くことができたら、次の行動について考える。

と言っても、今の状態じゃ取れる選択肢は全然ないよな…とりあえずこの森を出て、人を見つけること…簡単だけど、そんなところが目的も定まったので、さっそく移動することにする。

「改めて見ると、この場に留まってること自体が危険だったな…血の匂いがたちこみすぎてる」

頭も働き、心が落ち着いてくると、様々な感覚が鋭敏になってくる。

そして自分が奪った命の感触も蘇ってきた…まあ…あの場合は仕方なかったよな…今さら後悔しても遅いか…

そう思うことにして意識を切り替える。

気のせいかなにやら複数の気配がこちらを伺っている気もするので、早々に移動を開始する。

再び携帯の光を頼りに夜の河原を下る。
環境に慣れたのか、多少の空腹と渴き、疲れを感じるが足取りはまだ軽い。

そう思いながらしばらく移動していると、空も明らんできた。
「あっちから太陽が昇るってことはあっちが東なのかな……」
などと呟きつつ、さらに移動していると……

「あつ！」と思わず声をあげてしまうほどの光景が目の前に広がった。

そこには広大な湖が広がっていた。

河口付近が森の出口のようで、湖の向こう側は草原のようになっている。

ちょうど俺が歩いてきた川に対して湖を中心にYの字でさらに川が流れているようだ。

ひとまず森を抜けた安堵感が半端なく、思わず「いやっほーい」と叫びながら湖の外周を走ってしまった。

ひとしきり、はしゃいだ後に「結局、水も食料もないし、死ぬ一手前なのは変わらないな……」という事実気づくまで……

1時間ほどで休憩と仮眠を済ませたくらいに、携帯の電池が切れた。
ここまでよくがんばってくれたなあ……という感慨と、このまま夜に

なったらマジでやばいという不安が同時にわき上がる。

まあ、いちいち不安がってもキリがないし、とりあえずどっちに進むかを決めるかな…

もちろんどっちの川づたいに行くかってこと…だが…

「ん？あれは…？」

俺の視界が上空にあがるあるモノを捉えた。

俺が見るのは今まさにどっちに行こうか迷っていた川の一方の先であがっている白いモヤだ。

あれは…煙り？もしかして人がいるのか？

逸る気持ちを抑えながら、柔道着片手にそちらに向かって走る。

Yの字の左の川沿いを10分ほど走ったところで少し先に人影が2人、たき火を囲んで座っているのが見えた。

俺はもう、うれしくてうれしくて仕方なく、大声で「おい、おい！！」と呼び掛けながら、右手をブンブン振った。

その2人はすぐ俺に気づいたようで、立ち上がり、一方は槍を、一方は短剣を2本それぞれ両手に持ち、こちらに向かって構えをとる

…そして…

「とまれ！！それ以上近づくな！！」

と…ってええええええ！？まさかの威嚇！？

いやいやいやいや、なんで！？なんでそうなるんすか！？

つと驚愕しながら俺はその場に足を止める。

「あのーすいませーん！俺、一般人でーす！遭難者でーす！助けてくださーい！」

だいたい、6、70メートルぐらい先にいるお二方に、俺は必死の救難信号を送る。

そんな俺に対して全然警戒を緩ませることなく、2人組の一方が俺に声をかけてくる。

「お前、どこの種族の者だ？ハーデスか？なぜあの森の方から現れた！？冒険者ならギルドカードを見せろ！！俺達に近づいてきた理由はなんだ！？」

いやいやいや、何言ってるのあなたの方！？しかも質問の数多いよ！？そんな悪いことしたか俺！？

「ちよちよつと待ってくれよ！！あなたが何言ってるのか全然わかんないんですけど！！とりあえず俺は単なる善良な遭難者なんだよ！！いきなりあの森にほっぽり出されて、命からがらやつとここまでたどり着けたんだよ！助けてくれよ！見ればわかるだろ！？武器どころか飲み水もないんだぞ！！」

と叫び、俺はその場で両手を挙げながらグルツと回った。

すると向こう側で何やら話し合いが始まったようで、俺はポツンとそれをしばらく眺める羽目になった。

こりゃダメかな？と泣きそうな気分になってきた頃、何やら結論が出たようで、2人がこちらを向く。

「わかった。とりあえずゆっくりこちらへ来い！！その代わり、少

しでも妙な仕草をしたら……わかってるな!!」

「え?…あ、ああ…わかってる」

よっしゃあつっ!!」

ああ、よかったあ…これでまたこんなところに置き去りにされたら洒落にならなかった…(涙)

ホントよかったあ…

俺は胸の内に込み上げてくる安堵を痛いほど感じながら、(たぶん)
恩人2人に向かつて歩いていった。
になつてくれるであろっ

6（前書き）

拙い作品ですが、よろしくおねがいします。

俺はオタクではないと自負している。

それは決して彼らを否定的に見ているからではなく、どちらかというと敵わないというある種の畏怖の念からきている。

とはいえ、一般人であるかと言えば、それも微妙だ。

マニアックな漫画も読むし、ライトノベルも読む、アニソンで熱くなれるし、アニメやエロゲーで泣いたことだってある。

だが、オタクほど収集物も持ってないし、知識もない、イベントとかにも全く行かない。

つというかなり中途半端でどっちつかずな奴なのだ。

つまりまあー何が言いたいかというと…「そういう知識」がある程度実装されているのが俺だということだ。

そして、そんな俺だからこそ半ば確信を持ちつつも否定し続けているたある考えがある。

「ここ…異世界じゃね？」

まあー昨夜襲ってきた化け物ではほぼ確定っちゃー確定だったんだが、中途半端な俺としては、それを受け止める勇気が全くもってなかったんだ……

だがしかし……

これを目の前にしてしまったらもう駄目だ……

いくら俺でも諦めるしかない……

「い、犬耳と猫耳……」

俺の目の前にはたぶん獣人と呼ばれる方々が2人いる（涙）

「何か言ったか？」

槍を構えたままそう問いかけてきたのが、犬耳の方だ。どうやら男性のようだ。

こちらへの警戒心が丸出しすぎて俺の心が折れそうだ。たぶんさっきまで大声張り上げていたのもこいつだろう。

もう一方の猫耳の方は、短剣を逆手に持つてはいるが、腕は下ろしていて自然体だ。

身体つきや鎧の形状からも女性だとわかる。結構美人だ。

2人とも、顔つきがなんとなく犬っぽいとか猫っぽいというだけで、単純に犬や猫が二足歩行になっているというわけじゃない。

体毛とかは服やら鎧で確認できん。

俺がボォーッと2人を観察していると。

「んでお前、何者なんだ？なぜスプリガンの森から歩いてきたんだ。」

犬耳が俺にそう問いかけてくる。

さて、なんて答えよう……

正直に異世界から来ましたとか言ったら状況が悪化しそうだ……まあーベタだがこれしかないだろう。

「実は俺、記憶がないんだよ。覚えているのは名前だけで、さっきもちよつと言ったけど気づいたらあの森にこれと一緒にほっぽり出されてたんだ。」

左手に持った柔道着を持ち上げながら、胡散臭いことこのうえないセリフを吐く俺（苦笑）

案の定2人とも訝しげな表情をする。
そして犬耳の方がなんか言いかけた時

「ルー、相当怪しいけど、嘘を言ってる風でもないわ。ここはまあ助けてあげてもいいんじゃない？こんなボロボロの子を見捨てるのも後味悪いじゃない。」ルー（たぶん犬耳のこと）の左肩に手を置きながら、猫耳の彼女がそう言った

め、女神だ……

俺が両手を合わせ、ひざまづいて感謝しそうになったとき、彼女はこちらに視線を合わせ

「あんたも、自分が相当怪しいのくらいわかるでしょ？大人しくしてれば近くの村までくらは連れてってあげるわ。でも、肝に銘じておきなさいよ？なんか怪しいことしたら容赦なく殺すからね？」

「……りよ、了解っす」

俺は涙目でうなずくほかなかった。

その返事に不承不承といった体だが、一応納得してくれたようで、ルー君もずつと俺に突きつけていた槍を下ろしてくれた。

「さあ！そうと決まったら朝ごはん食べましょ？あなたもちろんいるでしょ？」

待つてましたこの時を！！

実は彼女達の後ろで刻一刻と鍋に入ったスーパ的なものがグツグツいつていて、すきっ腹には罪な匂いをさせているのだ。

俺は、心の中でガッツポーズをとりながら

「はい！いただきます！」

と返事をする。

そんな俺を尻目に食事の準備にとりかかる2人。

この世界に来て初めての食事に胸を踊らせつつ、2人へ手伝いを申し出るのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5412z/>

異世界でベタに生きる

2011年12月19日22時59分発行